

別表 人口と世帯数の推移

(単位：人：世帯)

区分	昭和 50 年	昭和 55 年	昭和 60 年	平成 2 年	平成 7 年	平成 12 年
総人口	19,142	19,524	19,535	18,968	18,533	17,704
一般世帯	4,754	4,947	5,066	5,059	5,165	5,613
1世帯当たり人員	4.30	3.95	3.86	3.75	3.59	3.15

(資料：国勢調査)

(5) 新町名称「あさぎり町」について

「あさぎり町」という名称については、平成 13 年 5 月 25 日に開催された第 24 回中球磨 5 か町村合併協議会において「中球磨 5 か町村の合併推進」が確認されたことに基づき、同協議会において、平成 13 年 6 月 11 日から 8 月 15 日までの約 2 ヶ月間広く新町名の公募を行い、内外からの応募総数 3,981 点の中から、協議会の付託を受けた新町名候補選定小委員会（各町村代表 10 名の協議会委員をもって構成）により 4 点を選考、平成 13 年 9 月 11 日に開催された第 28 回協議会において、「新鮮さ・清らかさ・自然を表すイメージで好感が持てる」、「農産物のブランド名としても売り込める」、「誰もが覚えやすく情報発信に便利」、「若者の支持が多い」などの理由により、全会一致で決定された。

2. 上村・免田町・岡原村・須恵村・深田村の沿革

人吉・球磨地方（人吉市・13 町村）は、鎌倉時代に遠州（現在の静岡県）相良から入国した相良氏によって、明治維新まで約 700 年間の永きくにわたり統治された経緯があり、周囲を山地に囲まれている地理的要因から外部からの大きな侵略を許すこともなく平安・桃山文化をも温存した九州でも独特の文化圏を形成してきた。

その中であって球磨盆地の中心部に位置し、中球磨と呼ばれてきた 5 か町村は明治 28 年以降、それぞれの町村の枠組みを変更することなく今回の新設合併に至っている。

(1) 上村

球磨郡の東南部に位置し、東は多良木町、西は錦町、北は免田町及び岡原村に接し、南は標高 1,417 m の白髪岳を主峰とした国見岳、小白髪岳などが連なる九州山脈の一部となって宮崎県に接している。村の南部は全体的に山岳地帯となっているが、北部に向かって緩やかに傾斜し、扇状の地形が形成され、球磨川の支流である免田川等の流域が平野部となり、主要な農産地となっている。

村名の由来は明らかではなく、当初は南部高台を上村と称していたが、中世以後、現上村一円の総称となった。

村の沿革については、建久 9 年（1198 年）、相良長頼が球磨の地頭職に補されて、その四男四郎頼村が上村を領し、麓城に拠って治めていた。その後 14 代頼孝の時代に当主に叛いて滅亡し、以来当主自ら当地を治めて明治に至っている。

明治 4 年（1871 年）、廃藩置県によって人吉県に属し、明治に至っている。

同 12 年の郡区長村編制法の施行により、上村、皆越村は同一行政区域となった。同 22 年の町村制施行後両村は組合村となって役場を設けていたが、同 28 年合併し上村となった。



上支所（旧上村役場庁舎）

(2) 免田町

人吉盆地の中央に位置する免田町は、多良木町、岡原村、上村、錦町、深田村、須恵村との境界を有し、東西8.4 km、南北2.4 km、面積10.31 km²の帯状の形態を有する平坦な地形の町である。

町の東部を岡原村から流れる井口川、中央部を上村から流れる免田川がそれぞれ球磨川に合流しており、それらに沿って水田が開けており、複合経営が行われている。

免田町は、中球磨地域の交通、経済、交流の中心地として町の東西を第三セクターである「くま川鉄道」、国道219号が走り、上村、岡原村、須恵村、深田村と県道、主要地方道により南北につながっている。

町名の由来は明らかではないが、平河文書によると、南北朝時代、当地には永池村、黒田村、目田村があったことが記されており、また免田家文書によると、室町時代、免田村が記されており、黒田村はなくなっている。

このことから、この時代に目田村と黒田村が統合され「免田村」と称したものと推定される。

町の沿革については、明治維新前約七百年は相良氏の統治下にあり、明治5年(1872年)9月、戸長がおかれ、同12年3月には単独で一行政区となり戸長役場の設立がなされている。

明治17年には須恵村とともに免田列村戸長役場のもとに統治を受けることになったが、同22年の町村制施行の時に独立村となって再び免田村として称し、昭和12年4月1日、町制施行により免田町となった。



新町本庁舎 (旧免田町役場庁舎)

(3) 岡原村

球磨郡の東南部、東北部分は多良木町、西は免田町、南は上村に接する面積20.35 km²の純農村である。

地勢は、村の東南部は黒原山を主とする山地であり、北西部に向かって平野が開け水田地帯となっている。

村名の由来は、明治22年4月の町村制施行に伴い、岡許村と宮原村が合併した際、両村の名を一字ずつとって「岡原村」とした。

村の沿革としては、明治維新以前は相良氏の統治下にあったが、明治12年、郡区町村編制法施行に伴い、岡許村と宮原村は1行政区として戸長役場が設けられていた。同22年4月、町村制の施行に伴い戸長は村長と改称され、同時に両村が合併して岡原村となった。



岡原支所 (旧岡原村役場庁舎)

(4) 須恵村

球磨郡の中央部に位置し、東は多良木町、西は深田村、南は免田町、北は相良村に接する面積 17.98 km²の村で、北部は面積の7割を占める山地となっている。

村の中央部を南下し球磨川と合流する阿蘇川及び南部を東西に流れる球磨川の流域を中心に水田が開け、複合経営が行われている一方、北部の丘陵地帯は国営川辺川総合土地改良事業等による畑地帯の整備が行われ、梨、飼料作物の作付けが行われている。

村名の由来は、相良長頼が当地方を治めていた当時（1198年）、球磨郡は、白間荘、須恵荘、永吉荘の三つの荘に分かれていた。

そのうち須恵荘は、現在の須恵村、免田町、上村、錦町にわたる大きな区域であったが、明治維新後、現在の地域のみを須恵村と称するようになった。

村の沿革としては、明治以前は他の町村と同様であるが、明治12年の郡区町村編制法の施行に伴い須恵村は一村で一行政区域となり、須恵村戸長役場と称して村政を行っていた。同17年には免田村と行政区域を同じくし、同一の戸長役場を設けたが、22年の町村制の実施と共に免田村と分離して須恵村となった。



須恵支所（旧須恵村役場庁舎）

(5) 深田村

球磨郡のほぼ中央に位置する深田村は、東西4.5km、南北6.5km、東は須恵村、西は錦町、南は免田町、北は相良村と接する面積 21.25 km²の村である。

地勢は、村の南部平坦部を球磨川が東西に流れ北部山地帯から銅山川、田頭川が球磨川と合流している。集落はこれらの支流に沿って点在しており、農地も早くから水田が開けていたが、須恵村同様北部丘陵地帯は国営川辺川総合土地改良事業等により農地開発が行われている。

村名の由来は不明であるが、当地域の地勢及び地形等により選定されたものと考えられ、明治初期には深田村と称されていた。

村の沿革としては、明治以前については、相良氏の統治下にあったが、12年の郡区町村編制法の施行により、戸長役場が設けられると、木上村（現錦町木上地区）と同一行政区域として統治

された。22年の町村制の施行により木上村と組合村として発足していたが、27年分離、単独村となり深田村となっている。

昭和27年には、相良村との隣接する丘陵地帯に開拓団が入り、開拓地区を形成した。

この地区は村境界を挟んで両村に拡がっていたので、行政事務の取扱い、その他の事情によりいずれかに編入することとなり、深田村に編入され、新深田地区となっている。



深田支所（旧深田村役場庁舎）

